

音源の比較試聴(37)
—ヴィヴァルディの四季—

1. 始めに

前報(36)に引き続き、各種音源の再生経路に関する仮想アースとアースアキュライザーや OPT ISO BOX や LAN iPurifier Pro などを含む種々の対策の効果の確認のため、各種音源の比較試聴を実施します。

2. 音源の比較試聴の試聴方法と音源

アナログ関係の対策の経過は前報(27)でも延べたとおりで、配信や CD 再生の光アイソレーションなどの対策は fidata HFAS1-S10 の活用シリーズや OPT ISO BOX の導入シリーズや LAN iPurifier Pro で報告してきました。

今回、同じ曲のアナログ盤と CD と STAGE+からの配信を比較試聴します。

アナログ盤は下記を使用します。

PHILIPS 412-633-1

フェリックス・アーヨ (ヴァイオリン)

イ・ムジチ

PHILIPS 28PC-70

ピーナ・カルミレッリ (ヴァイオリン)

イ・ムジチ

RCA RCA-1033

ヴィットリオ・エマヌエレ (ヴァイオリン)

ソチエタ・コレルリ合奏団

LONDON SLA(A)1020

アラン・ラブディ (ヴァイオリン)

ネヴィル・マリナー指揮 Academy of the St.Martin Fin-the-Fields

CD は下記を使用します。

PHILIPS PHCP-3440

マリアーナ・シルプ (ヴァイオリン)

イ・ムジチ

BD は下記を使用します。

Camerata CMBD-80004

パウロ・フランチェスキーニ (ヴァイオリン)

クラウディオ・ブリツィ指揮イ・ソリスト・ディ・ベルージャ

配信は STAGE+から下記を選択します。

ギドン・クレーメル（ヴァイオリン）

イギリス室内管弦楽団

アンネ・ソフィー・ムター（ヴァイオリン）

ヘルベルト・フォン・カラヤン指揮ベルリンフィル

ジャニーヌ・ヤンセン（ヴァイオリン） 他

それぞれの音源は、下記の経路で聴いていきます。

アナログ盤

LINN LP-12→ZANDEN Model 12→Brooklyn DAC+→TruPhase(A)

CD

EMT981→TruPhase(B)→TruPhase(A)

BD

DMR-UBZ→Sonica DAC→DA-3000→TruPhase(A)

STAGE+

ルーター→スイッチングハブ→PC→Brooklyn DAC+→TruPhase(A)

3. 音源の比較試聴結果

アナログ盤は、それぞれのレーベルと録音年代に対応したイコライザー特性で聴いていきます。

LP-12 のフォノケーブルの引き出しをバランス化してからアナログシステムの変更はありません。

アーヨとイ・ムジチの盤は、音源の比較試聴(23)とヴィヴァルディ盤を聴く(6)でも報告していますが、くっきりと明晰で、すっきりしていながら厚みもあり、定位もしっかりしていて華やかな音です。

カルミレツリとイ・ムジチの盤は、音源の比較試聴(23)とヴィヴァルディ盤を聴く(6)でも報告していますが、1982 年の DIGITAL 録音らしく、すっきりと澄み切った切れ味の良い音です。

エマヌエレとソチエタ・コレルリ合奏団の盤は、ヴィヴァルディ盤を聴く(5)でも報告していますが、イタリアのバロックアンサンブルらしく、ややナローレンジながら明るく華やかで歯切れのよい明晰な演奏です。

ラブディとマリナー指揮 Academy of the St.Martin Fin-the-Fields の盤は、ヴィヴァルディ盤を聴く(4)でも報告していますが、イ・ムジチの穏やかでウォームな演奏に対し、ワイドレンジで解像度が高く、切れがよくすっきりとした演奏です。

以上については、以前の報告にあったイコライザー特性を踏襲して試聴し、以前の報告の印象をほぼ再確認できました。

CD の再生に使用する EMT981 は 300B アンプまでバランス化し、バランスアナロ

グアキュライザーを介在させてからシステムの変更はありません。この CD は、1995 年の収録で、EMT981 のアナログ的な音質であり、上記のイ・ムジチのアナログ盤の音質に通ずるものがあり、実際にイ・ムジチの演奏会で聴いてきた印象が再現されているようなところもあります。

BD の再生経路は特に変更はありません。この BD は、2012 年の収録で、BD らしい繊細ですっきりとした音です。

STAGE+の配信のクレームルとイギリス室内管弦楽団の演奏は、1981年修道院の図書館での収録とあり、天井が高く間接音が豊かです。クレームルのエネルギッシュな演奏とアンサンブルの切れのよい演奏が聴きとれます。

ムターとカラヤン指揮ベルリンフィルの演奏は、1987 年の収録で映像のサイズや解像度からすると TV か何かの収録からデジタル化されたようなもののようです。音質はややナローレンジながら、ムターの艶っぽい音色やカラヤン流の美意識が感じられます。映像からカラヤンがオルガンで通奏低音を担当しているように見受けられます。

ヤンセンのアンサンブルの演奏は、いかにも現代の演奏のようで、すっきりと切れ味のよい演奏です。

4. まとめ

アナログ再生、STAGE+からの配信を比較してみましたが、これまでの対策で、すべてにおいてレベルが向上しており、以前のような格差がなくなっています。

アナログ再生は、LP-12 からバランスアナログアキュライザー経由での ZANDEN のフォノイコへの入力と仮想アースの効果が効いており、イコライザー特性の対応が有効です。

CD 再生は、EMT981 へのクロック入力や仮想アースとバランスアナログアキュライザー経由での 300B アンプまでの経路すべてのバランス接続が効いています。

BD 再生は、バランスアナログアキュライザー経由での DA-3000 への入力やクロック入力や仮想アースの効果が効いています。

配信は要所への仮想アースと LAN 経路への OPT ISO BOX と LAN iPurifier Pro の介在、USB 経路への USB アキュライザー介在と Brooklyn DAC+へのクロック入力や仮想アースが効いています。

これらの再生では、それぞれの対策の結果、配信がアナログや CD や BD に格段に劣るようなことはなく、それぞれの再生は、すべて固有の魅力を発揮できるようになりました。

以上

